MANIKA－MANIKA

The Girl Who Lived Twice

神の力の多様性に目覚める神父の、雄大なインドを舞台にした幻想的な物語。

●フランソワ・ヴィリエ監督『マニカの不思議な旅』

松枝　到

ぼくたちは、どこから来たのか。

この疑問は根源的なもので、知りうるかぎり、はるか古代から人間はこの疑問にとらわれつづけていた。たとえば世界最古の物語といわれるバビロニアの「ギルガメシュ叙事詩」(紀元前二〇世紀ごろ)のなかでも、生けるものの死と永遠性との葛藤が英雄を悩ませ、自分が自分であること、つまりはアイデンティティの根源を問いつめて巨大な謎とむきあっている。

私という存在は「どこから」来て「どこへ」行くのか。いつでも私という意識は「ここ」にしかないのだが、どこかからどこかへの道程のなかにしか「ここ」がないということも、ぼくたちはよく知っている。私とはなにか、なぜ、いま、ここにいるのか。この疑問は、すぐさま「どこから―どこへ」という疑問につながってゆく。それにしても「前世―現在―来世」という流れは、いずれにしても生きている「現在」からしか問いかけることのできない永遠の謎ではないか。だから、もし前世と来世とがつながっていて、来世もまたひとつの前世だとすれば、この果てしない円環はシジフォスの悪夢にも似ている。なぜなら、このとき人生なるものは、期待と不安に満ちた「どこか」からも切り離され、果てしなく退屈な「いま」の連続、永遠の現在の反復になってしまうからだ。

ひとりの人間としての生と死が、いや、人間であるかどうかも定かではないが、ふたたび新たな生と死に結ばれ、永遠にくりかえされ、流転する。これこそが古代インド哲学にいう輪廻(サンスクリットでいうサンサーラ)なのだ。こうした発想は古代ギリシアにも見られ、オルペウス教やピュタゴラス学派の人々も、霊魂は不滅であって人間や他の動植物にも生まれ、前世から来世にかけて流転すると説いている。もっとも、これはインドからの影響による発想かもしれなくて、もっとさかのぼってウパニシャッド哲学のなかにことばを求めると、より徹底した輪廻思想の表現が見られるだろう。

「あたかも刺繍をする女が刺繍の一部分をほどいて、別のもっと新しく、さらに美しい模様をつくりだすように、アートマンも、この肉身を捨て、無意識状態を離れて、別のもっと美しい形――あるいは祖霊の、あるいはガンダルヴァの、あるいは神の、あるいは造物主の、あるいはブラフマンの、あるいは他の生物の形をとる」(ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド)

また古代インドのウパニシャッド哲学者であるヤージュニャヴァルキヤは、人は善くおこなって善く生まれ、悪しくおこなって悪しく生まれる、といっている。前世のおこないが現世の状態に反映し、現世のおこないが来世の状態に反映するというわけだ。これが仏教に伝わってくると、因果応報、自業自得となるのである。有情(意識をもった生きもの)には、かならずこうした善悪の行為と苦楽の報いがセットになっている。だからこそ、この果てしない輪廻からの脱出(解脱)が必死に求められ、瞑想による真理の直観が追求されたのである。

しかし、こうした宗教的な修行とはもっと別のプロセスでみずからの前世を知り、見てしまった人々がいる。この映画の主人公マニカのような、独特の感性をもった人の場合である。

十歳の少女であるマニカは、インド洋に面した小さな村に生まれた。もともとカトリック信者のおおい地域らしく、この少女もカトリック教会の開く小さな学校に通っている。両親は貧しい漁師で、生活もつつましいが、美しい海と優しい両親にかこまれた生活は、この少女の精神を清らかにはぐくんでいるようだ。ところが、ときおりマニカは、思いがけないことをする。驚くほどみごとなクイーンズ・イングリッシュで挨拶をしたり、すばらしくしなやかな身振りでカタック・ダンスを踊ってみせたりするのだ。ところが、だれもそうしたことを教えたわけではない。この学校の教師である神父ダニエルは、これに気づいてマニカに注目する。すると彼女は、みずからの前世を語り出すのだ。

自分は前世でラクシュミー(これはヒンドゥーの美と幸運の女神の名だ)という女性だったこと、ネパールのデュリコートに住んでいたこと、愛する夫がいたが死によって引き裂かれたこと、その人の名はランジート・シャーマということ。こうしたことをよどみなく語りながら、マニカは前世に生きていた場所にいくことを願うのである。もちろん神父ダニエルはこれを信ずることができないし、両親にとってもおなじことだった。両親は彼女をヒンドゥーの行者のところに連れてゆき、なにやらまじないをおこなってもらったりする。こんなところがいかにもインド的でおもしろかったが、それでもマニカの確信は揺るがず、ついにある日、彼女は前世の夫と会うために、北へ向かって出発してしまうのだ。

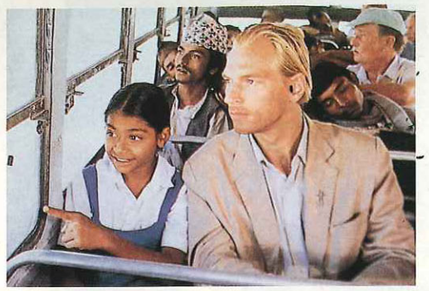
どうやら彼女は、その鋭敏な魂の力によって、夢をとおして前世を無意識の奥底から引き出していたらしい。マニカには現実のモデルがいる。インドのマトゥラーにいたシャンティ・デヴィという少女で、当時九歳だったが、もともと聾唖だった彼女が、ある日とつぜんのように話しはじめ、前世の夫のことを語りだしたのだ。彼女はすぐに前世の夫を見分け、かつて夫とともに住んでいた家に迷うことなく案内したという。マニカの場合は、唖でこそないものの、いかにも感性のするどい少女だし、シャンティ・デヴィとおなじように、その夫をたちまち見分け、はじめて訪れたはずの家のなかで祭壇の扉を迷うことなく開き、ていねいにヒンドゥーの祈りを捧げるのだった。

夢によって前世を見ることは、ヨーロッパにもおおくの事例がある。精神分析学者のメダルト・ボスは、これをオカルティックな夢として分類しているが、こうした例は古代エジプトにもあったらしく、夢分析のなかでも前世の問題は古くから重要なものと考えられていたらしい。だから、ダニエルがマニカに付き添ってネパールに向かい、この出来事にショックを受けながら神の力の多様性にめざめていく様子は、この物語のもうひとつ重要な側面になっていることがわかる。マニカにとって、あるいはヒンドゥーの教えに忠実な人々にとって、彼女の見いだした前世は当然ありうべきことがらであり、珍しい出来事ではあっても疑いえないこととして受けとめることができた。しかし、カトリックの神父たちや軍人の娘としての教育を受けた前世の夫の後妻などには、最後の審判という宗教理念や科学という名の障壁の前で、どうしても転生を事実として受け入れることができず、心を動かすダニエルと訣別し、夫のもとから去っていくのである。

日本の感性からなら、どうだろうか。輪廻転生については、どうしても仏教的色彩が強くなるにしても、知識としては受けいれていくのではないか。日本の昔話や民話に生まれ変わりの類話はおおく、手塚治虫の『火の鳥』や映画『魔界転生』など、現代に投げかけられた転生譚も数数あるからだ。チベット密教にいうリンポチェ(活仏)のことを考えてみていい。自然の風景をつくりあげているひとつひとつの現象・事物が、いずれ自分の前世や来世の姿かもしれないと想像すること、風に揺れる木々やかすかに鳴く虫たちさえ、ことによると自分の親や子の生まれ変わりではないかと案ずること。そんな思いのなかにぼくたちの「いま」がある。とはいえ、事実として突きつけられたときには、やはり非科学的という語を投げだすかもしれないし、そうした分裂にこそ現代の日本人が見えるという気もしてはいるのだが。

しかしマニカは、前世の夫を確かめ、現在の彼の気持の動きを見てとることで、おおきく大人への一歩を踏みだしているようだ。そして彼女は前世の夫のもとを去り、ダニエルは教会を去ってゆく。ここでわかることは、前世を知るというプロセスが、けっして定められたプログラムを容認する身振りではなく、むしろ世界の多様性を再確認し、揺れ動く「いま」に入りこむ手がかりにしているということなのだ。だからこそ、ふたたび見いだされた海は、あくまで明るく美しい。知ることとは、謎を深めることなのだ。

いまや、ぼくたちはどこへ行くのか、と問わなくてはならない。



写真提供：巴里映画
5月18日より渋谷Bunkamuraル・シネマ2にて公開

CINEMA C TOPICS